

精神薄弱養護学校幼稚部における逆統合保育の実践（6）

—— 平成8年度の逆統合保育の概要と実践経過の中間まとめ ——

○神田基史 阿部幸子 根本文雄 大蔵みどり 数原照子 平田幸宏 京林由季子
 （筑波大学附属大塚養護学校） （東京成徳短期大学）

1. はじめに

平成3年度から逆統合保育（いっしょの保育）を試行してきた大塚養護学校幼稚部の実践を5度継続して報告してきた（平田1993、京林1993、京林1994、神田1995、神田1996）。今回はその第6報である。

本研究の目的は、年度当初より週5日の完全統合を実施した平成8年度の実践概要を報告すると共に、抱えてきた課題の中間まとめをすることである。

2. 平成8年度の「逆統合保育」の実践

①統合形態

幼稚部幼児7名（年少組4名、年長組3名）の中に健常幼児7名（三歳児4名、四歳児1名、五歳児2名）が加わり、幼稚部の日課（表-1）に則して一年間ともに活動する。

②統合期間

一学期始業式から三学期終了式までの一年間を完全統合する。

③統合幼児と学級配属

三歳児4名と四歳児1名は新規の保育希望者、五歳児2名は一昨年からの継続統合希望者である。

学級の配属は、男女比と人数を考慮して三歳女児2名と四歳男児1名は年少組、三歳男児2名と五歳女児2名は年長組に配属した。

④指導体制

教官4名、非常勤講師1名（水・金曜日）

3. 統合に向けての条件整備

統合に向けての条件整備として、平成六年度、七年度の実践を踏まえ、以下の条件整備を行なった。

- ・学校より研究協力依頼書を出し、承諾書を受ける
- ・保険に加入する（国立大学附属学校 PTA連合会）
- ・通知表、家庭訪問、学期末個人面談などは在籍児と同じ扱いとする
- ・学用品や教育上必要な持ち物（ロッカー、鞆、靴、箸箱、お手拭き、タオル、持ち物袋、日付シール帳、連絡帳など）、衣類（体操着、スモックなど）などは在籍児と全て同じものにする
- ・給食を正規の手続きで配食する
- ・身体計測、各種検診（内科、眼科、歯科、心電図）を在籍児と一緒に受ける（＊費用は実費徴収）
- ・統合児の保護者には学校だよりやPTA関係の配布プリント類など全部を配布する
- ・統合児の保護者には学校行事、部行事からPTA行事まで全て同一に参加する

4. 統合児の募集について

公募はせず、在学した統合児の親の知り合いと「公開保育」（学期に1回実施）の見学者から希望を募った。幼稚部の行事「年忘れ会」や「新年会」に親子を招待したり、練習保育を2月に希望の日数（平均3日程度）行うなどして親子の保育希望を確認してきた。

二年保育の幼稚園入園を前提に一年間集団保育を希望する三歳児の保護者が希望してくるケースがほとんどである。ただし、平成8年度は、三歳児で保育を開始し、幼稚園へ行かずに二年目の逆統合保育を経験した五歳女児2名が三年目も継続して来るようになった。また、四歳男児の場合は、保育園に在籍したが小集団で指導者の多い本校幼稚部を選んで転園してきた。

研究試行とはいえ、区内の幼稚園の統廃合問題もあり、園児の募集に関しては周囲の状況を十分把握しておかねばならない。

5. 在籍児の兄弟姉妹の統合保育について

平成6年度に2名（弟、妹）、7年度に1名（妹）在籍児の兄弟姉妹を統合児として受け入れてきた。

表 1 幼稚部の週時程

曜日	月	火	水	木	金	
9:15		個別指導				
9:45		登校				
		学校での指導・朝の支度（衣服の着脱、排泄、片付け）				
		自由あそび				
10:50		朝の集まり（シールはり、歌など）				
11:00		朝の集まり	設定保育		造形	
11:10			「体育」「造形」「体育」「造形」			
11:50		排泄、移動、手洗い				
12:00		給食（準備、後かたづけ含む）				
12:50		帰りの支度 集まり	自由遊び			
			帰りの支度（着脱、排泄等）			
13:30		下校	集まり			
14:00			下校			

「特に、兄妹で同じ幼稚部に通え、同じ保育を受けることができたのは二人にとって価値のある一年でした。幼稚部に兄妹で通うことでお互いの存在がはっきりしたように思います。一年前と比べると、二人でいろいろなことをすることが多くなりました。同じ保育を受けることができたおかげで、家でも歌や手遊び等を一緒にやっていました。母親としても本当に有り難く、感謝の気持ちで一杯です。」

(平成7年度末 アンケートより)

という声に代表されるように、兄弟姉妹相互の関わりや親の負担軽減の観点から、今後も希望があれば在籍児の兄弟姉妹を統合児として積極的に受け入れていきたい。

6. 統合児保護者の感想・評価

平成8年度の保護者も、毎日子供が幼稚部へ行くことを楽しみにしていることを第一に挙げている。

「一緒にの保育に通わせていただき、子供は在籍児を障害があるとかないとかでなく、本当に自然に友達として受入れているのではないかと思います。それも、在籍児に統合児が気を使うことなく(障害があるから自分たちが我慢しなければいけない場面もなく)“いっしょの保育”の名のとおり、みんな“いっしょ”に指導していただけたから、子供も自然に無理することなく、学校に行けば楽しく過ごせたと思います。」

(平成6年度、三歳男児の母)

「何でもみんないっしょに活動する。しかし、自由遊びでは、やりたいことをやらせてくれる。お集まりの時など、欠席者への思いやり、心の向け方など自然な状態で、当たり前のように子供たちに伝わり、仲間意識が強くなっていったように思います。在籍幼児、統合幼児という区別のない同じ幼稚部の仲間であり、自分の幼稚部という意識は子供の正直な心であり、初めは、私自身少し遠慮しがちでしたが、統合保育は子供たち同士の関わりだけでなく、大人の意識をも変えてくれました。」 (平成7年度、三歳女児の母)

「大人は、何かにつけ色めがねで見えてしまうことが多々ありますが、子供は戸惑うことはあっても自然に良い関係を築き、理解し、仲間として付き合っていたように思います。」 (平成7年度、三歳男児の母)

などの感想を見ると、三歳児の統合保育参加は、保護者の評価としては比較的好かったことが示唆される。

7. 在籍児保護者の感想・評価

もともと養護学校の幼稚部ということで、「健常児

の活気や刺激がほしい、普通の子たちがいる環境で育てたい」といった願いが基本的にあり、統合・交流に関しては保護者の期待も大きいものがあつた。平成6年度末、7年度末のアンケートでは全員がその成果に触れてそれぞれの感想を述べている。以下に、代表的なものを列記しておく。

「遊び、言葉など目に見えて健常児との交流保育が障害児である自分の子に与えているものの多さを感じた。特に、気持ちの面でも同じなのだと仲間意識がつき健常児に対する気おくれがなくなり、人の中でも遊べるようになった。」 (平成6年度 年長児の母)

「仲間との生活の中で、動きの大きな子や興味をひく遊びをしている子に影響され、“あの子がしているから”と真似をしようとしたり、一緒に参加しようとする意欲がずっと増えていったと思います。理解しあえた者同士で遊ぶことは、障害があるなしに関係なく楽しいもので、それがお互いをものすごく成長させるということを実感しました。」

(平成6年度 年長児の母)

「健常児からの刺激も欲しいし、先生方のきめ細かい指導も受けたいしと欲張った気持ちで幼稚部を選びました。そして、一年が過ぎ、我が子の成長に母親としてたいへん満足しています。」

(平成7年度 年長児の母)

「障害児が健常児といっしょに保育できる数少ない場所であり“とてもありがたい”の一言につきます。昨年一年間通して統合児のお母さま方とは、とても自然に子供を持つ親同士という関係でのおつき合いができ、とてもよいめぐり逢いとなりました。」

(平成7年度 年少児の母)。

8. 逆統合保育の今後の課題

平成6年度から三年間、養護学校幼稚部における同環境、同日課での統合保育を試行してきたが、抱える課題は解決どころか増えて行くようにも思える。

- ・公開保育参加者の感想・評価の検討
- ・定員10(年少5、年長5)に対する統合児の適正規模の検討
- ・在籍幼児と統合幼児との交流や関わりの方針
- ・五歳(年長)の統合児に対する現行指導計画(目標、内容、方法)の見直し
- ・統合児の追跡調査(後の生活に及ぼす逆統合保育の効果検討)
- ・地域の幼稚園・保育園との交流

などを当面の課題としている。“公開保育”を実施し、他者評価を得ながら実践を継続していきたい。